

## 2017年度 関西学院初等部 学校評価を終えて

関西学院では、2008年度に初等部が開校して以来、初等部・中学部・高等部が共同し、一貫性のとれた学校評価制度を構築し、互いに連携を取り、学校評価の実施と結果の公表に取り組んできました。

2010年度からは、幼稚園から大学院まで連なる関西学院の強みを生かし、接続する学校の先生方に、専門的な視点からのご意見を伺うことで第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。

2017年度の初等部の取組は、「キリスト教主義教育」「教育課程・学習指導」「生徒指導」「研修（資質向上の取組）」の4項目を重点として、評価項目を設定しました。

評価の実施にあたっては、各項目について児童、保護者、教員にアンケートを実施し（回収率①児童 100%、②保護者 74.8%、③教員 100%）、それぞれの立場からの回答を得ることにより客観性を確保するとともに、回答者個々の意見も重視するよう努めました。

次に、アンケートの集計結果を分析するとともに、各重点項目についての初等部の取組状況を教職員が総括し、今年度の取組に分析、評価を加え、今後の改善の具体的方策を示し、初等部の自己点検・評価としました。

さらに、それらについて接続する学校関係者の関西学院幼稚園園長、中学部部長、教育学部准教授及び評価情報分析室室長の専門的視点に基づくご意見を「第三者評価／学校関係者評価」とし、合わせて初等部の学校評価としてまとめました。

本日、関西学院評価推進委員会（2018年3月9日）において、初等部の学校評価が協議・承認されました。

初等部は関西学院がめざす世界市民の育成にむけた全人教育の土台を培う大切な役割を担っていることをしっかりと自覚し、子どもたちが生涯にわたって“Mastery for Service”の体現をめざしていけるよう、教員の力量を高め、保護者の理解と協力を得て、より質の高い初等部の教育活動を展開しなければなりません。

関西学院初等部として、本学校評価を真摯にとらえ、教職員一人ひとりが自らの課題を探り、組織としてその課題解決に向かって取組を進め、今後もさらなる改革を図ります。

2017年度初等部の学校評価を項目別に次頁以降に記し、ホームページ上で公表することにより、社会的信頼を高めるよう努めたいと考えています。

2018年3月9日  
関西学院初等部  
校長 田近敏之

## 学校評価

### 教育理念・使命・目標

#### 【教育理念・使命】

キリスト教主義教育に基づく全人教育の「はじめの一步」を担う。

#### 【目標】

キリスト教主義教育を土台とした「建学の精神」を体得し、スクールモットーである“Mastery for Service”の実現をめざし、知性・情操・意志を備えた児童を育てる。

#### 【初等部聖句】

「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」

[意志]

[知性]

[情操]

### 2017年度の評価項目

- ・キリスト教主義教育  
初等部の教育の根幹をなすため、評価項目として設定した。
- ・教育課程・学習指導  
教育理念にふさわしいカリキュラムを編成するために、この項目を設定した。
- ・生徒指導  
児童が安心して生活できる学校づくりをめざしているため、この項目を設定した。
- ・研修（資質向上の取組）  
より質の高い授業の実現を図るため、毎年の評価項目としている。

### 2017年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育 【キリスト教主義に基づく、たくましい生き方の育成】	自己評価	A
目標	建学の精神に基づき、キリスト教主義教育を初等部のあらゆる教育活動の中で展開し、児童がキリスト教の精神やスクールモットー“Mastery for Service”の精神を体得できるようにする。そのためにすべての教員、また保護者がその精神について共通理解をもち児童に向き合えるようにする。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>初等部では、関西学院の建学の精神であるキリスト教主義教育、またスクールモットーである“Mastery for Service”の具現化のために、様々な取組を行っている。年間約 200 回守る朝の礼拝（こころの時間）、聖書科授業、各宗教行事を土台としながら、児童・保護者・教職員がキリスト教主義教育の理念を様々な教育活動の中で展開してきた。</p> <p>今回の児童アンケート質問2「こころの時間や聖書の時間は、あなたにとって大切な時間だと思いますか。」に対する肯定的な回答は 94.7%であった。「強くそう思う」と回答した割合が昨年度と比較しても6ポイント増加して 60.2%となり、過去8年間で最も高い数値となった。このことからキリスト教主義教育が児童の中に深く浸透してきていることが分かる。</p> <p>保護者に対しては全学年の保護者対象の聖書講座（年間3回）に加え、PTA活動の一環として学年ごとに「聖書に親しむ会」を実施、また児童と共に礼拝を守る機会を提供している。これらを通して、関西学院のキリスト教主義教育について、また聖書を共に学ぶ機会をもっている。さらに新入生の保護者に対しても、入学前の2回のオリエンテーション、入学後のオリエンテーションで、初等部のキリスト教主義教育についても講話を行い、キリスト教主義教育の理念を共有する機会をも</p>		

	<p>っている。</p> <p>保護者アンケート質問3「学校は、キリスト教主義教育の理念について、保護者と共有する機会を設けている。」に対しては、肯定的な回答の割合が96.8%と昨年度と比較して微増した。全学年保護者を対象としている「聖書講座」に加えて、PTAと協力して開催している「聖書に親しむ会」が定着してきたことがその理由と考えられる。また保護者アンケート質問4「学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている。」との質問に対しても、肯定的な回答の割合が91.4%と昨年度よりも増えた。このことからキリスト教主義教育の良さを保護者が実感してくださっていることが分かる。しかし否定的な回答をしている保護者がいることも事実であり、そのことを受けとめ、初等部の教育活動の中で、さらにキリスト教主義教育を具体的に生かす工夫をしていく。</p> <p>教職員も様々な研修会などを通して、自らがキリスト教主義教育の担い手であるという自覚をもち、初等部の教育の働きを担っている。教員アンケート質問1「私は、礼拝や研修を通してキリスト教主義教育の理念を共有している。」に対する肯定的な回答が4年連続100%と全員が肯定的な回答をしている。また、教員アンケート質問2「学校はキリスト教主義教育を学校生活の中で具体化している。」との質問に対しても全員が肯定的な回答をしている。このことから、学校がキリスト教主義教育を土台とした教育活動を日々行い、具体化しようとする教員の意思の強さを読み取ることができる。</p>
<p>今後の方策</p>	<p>学校評価アンケートの結果を通して、初等部のキリスト教主義教育が大部分の児童・保護者・教員に肯定的に受け止められていると考えられ、このことから開校より10年で関西学院が大切に守ってきたキリスト教主義教育の理念が浸透してきたことが分かる。</p> <p>次の10年に向けて、より深く、より充実したキリスト教主義教育を展開していくための努力を継続していく。何よりも毎朝の礼拝を全員が大切な時間として守り続けること、そして様々な教育活動を通して、キリスト教主義教育の意味やスクールモットー“Mastery for Service”の精神を具体的に感じられるようにしていく。また全教員が、自分たちこそがキリスト教主義教育の担い手であるという意識を強くもち、児童・保護者と関わりをもっていけるような取組を充実していく。</p>

<p>評価項目 【テーマ】</p>	<p>教育課程・学習指導 【真理を探究する確かな学力の育成】</p>	<p>自己評価</p>	<p>A</p>
<p>目標</p>	<p>「キリスト教主義に基づく全人教育による人格形成」を念頭に「各教科の特性や児童の興味・関心に応じた教育課程の工夫」また、「学力の的確な把握」、「豊かな情操を育む芸術文化活動」をめざす。</p>		
<p>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</p>	<p><b>【具体的な取組の状況】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○各教科について、シラバスを見直した。教科の特性を踏まえ、重点を置くべき単元や領域などの時数配分を工夫するなど効率的で、実施可能なシラバスの作成に努めた。</li> <li>○研修委員会と連携し、「全員参加」「全員理解」を目標に授業研究や各教員の自主的な研究活動を積極的に行った。</li> <li>○5、6年生においては本年度も教科担任制を実施した。また4年生以下の学年においても芸術教科はもちろん、専門的教科についてできるだけ教科担任制を実施し、より教科の特性を深め、専門性の高い授業づくりに努めた。</li> <li>○特色ある教育活動の一つとして一貫して取り組んできた「KGタイム」については、教科教育では得られない領域に的を絞って、シラバスを見直し実施した。</li> <li>○「力の時間」においては「論理的思考力」を意識した内容に的を絞ったり、「風</li> </ul>		

の時間」においては、表現力豊かに「書く」ための様々なスキルを身につける内容に的を絞ったりした教材を作成し、担当が授業を実施した。

- 「光の時間」においてはALTとのTT制で全ての授業を行い、常にネイティブに接する学習環境を整えた。また、様々なコミュニケーションスキルの習得に時間をかけ、表現力を磨いてきた。さらに6年生ではそれらを実践するための場であるCCT（カナダコミュニケーションツアー）を実施し、コミュニケーション力の向上だけでなく、異文化交流を通じての国際理解教育も行った。
- 「的確な評価」を行うために、「通知書」作成のための評価規準を見直した。具体的には、数値評価を出すための評価項目やその割合などを各教科で統一することで、学年間差や学級間差が出ないような成績処理ファイルを作成し、教員全てがそれを利用した。また、外部業者による実力テストを今年度も実施し、相対的評価を得られるようにした。さらに「光の時間」については、より評価を明確にするため3年生以上の評価を文章表記から数値評価に変えた。2020年度より5、6年生は新学習指導要領において、外国語教育となるため、他校に先行して評価の在り方を模索している。
- 全校で取組む主な学校行事として「体育祭」「音楽祭」「図工展」「マラソン大会」を実施した。これらについては特別時間割を設け、児童が集中的に取組める学習環境を作った。また、3学期には児童の興味関心に沿った「文化芸術教室」を実施した。

#### 【学校評価アンケートによる評価】

保護者アンケート質問8「学校は基礎的知識や技能が定着する授業を行っている。」では85.7%の肯定的評価、質問9「学校は基礎的知識や技能を活用する場面を取り入れた授業を行っている。」では84.4%の肯定的評価であった。また、児童アンケート質問3「授業では、新しいことをたくさん知ることができますか。」でも肯定的評価が92.7%と高い。昨年度から比べてもその数値はポイントを上げている。真摯な授業づくりの成果と言える。

さらに、保護者アンケート質問10「学校は、楽しく分かりやすい授業にするために工夫している。」では、90.9%の肯定的評価、児童のアンケート質問4「授業は楽しいですか。」で90.0%の肯定的評価、質問5「授業はわかりやすいですか。」では、91.1%の肯定的評価となっている。昨年よりは若干ポイントを下げているが、高い水準を維持している。「全員参加」「全員理解」を掲げ、授業を工夫した成果である。また、補習授業など個別に児童の学習について寄り添ってきた結果とも言える。

保護者アンケート質問5「学校は、子どもの学力を把握している。」では、87.1%の肯定的評価、質問6「学校は、子どもの学力を保護者にきちんと伝えている。」では、81.8%の肯定的評価であった。この項目に関しては昨年度に比べポイントを上げている。評価を「伝える」場面は個人懇談会が主な場面ではあるが、そこでの丁寧な説明はもちろん、保護者が様々な場面で来校する際にも児童の学習や生活の様子について伝えている。また、日頃からも学習や生活で担任として気になったことを個別に電話で伝えたり、学級指導について学級通信を通じてお知らせしたりするよう心掛けている結果だと言える。とは言え、よりよい「通知書」の在り方については今後も課題である。2020年度より実施される新学習指導要領に沿った新しい通知書について検討委員会を継続させ検討したい。また、教員アンケート質問3「私は、児童の客観的な学力把握に努めている。」では、96.6%の肯定的評価、質問4「私は評価基準により、的確な評価を行っている。」では、100%の肯定的評価と高い。先に述べた「成績処理ファイル」等の作成過程を知る教員として、結果と

	<p>して出された評価についての確だと感じるのではないか。いずれにせよ、「的確な評価」についての教員の意識は高い。それは「的確な評価」が保護者との信頼を得るものだと自覚からでもある。</p> <p>保護者アンケート質問 11「学校は、風の時間を通して、豊かに言葉を使える力を育てている。」では肯定的評価 81.9%、質問 12「学校は力の時間を通して、論理的に思考する力を育てている。」肯定的評価 77.3%、質問 13「学校は、英語教育を通して、英語によるコミュニケーション能力を育てるとともに、基本スキルを定着させている。」では、肯定的評価 73.6%であった。また、児童アンケート質問 7「風の時間は好きですか。」では、肯定的評価 91.1%、質問 8「力の時間は好きですか。」では、肯定的評価 70.7%、質問 9「英語は好きですか。」では、肯定的評価 67.6%であった。保護者アンケート質問 13 で、「英語」の肯定的評価が昨年度よりも 8.4 ポイント上がったことは高く評価できる。TT制などの指導体制とこれまでの英語学習の定着、さらに今年度から実施した数値評価など要因は挙げられる。2020 年度に向けてこの評価をさらに分析し、高みをめざしたい。しかし一方、児童の「英語」に対する評価はやはり低いと言わざるを得ない。教科の特性と子どもの興味関心のバランスを見極め、シラバスを再検討したい。</p> <p>保護者アンケート質問 14「学校は、音楽、美術（図工）を中心とした芸術教育を通して、子どもの豊かな感性を育てている。」では、89.6%の肯定的評価を得ている。また児童アンケート質問 10「音楽や図工は好きですか。」肯定的評価 91.2%と高い。このアンケート結果については安定的な結果であるが、保護者アンケートについては昨年度よりわずかであるがポイントを下げている。「音楽祭」「図工展」とメイン行事が両者共にあるが、常により良いものを創ることが大切だと言える。</p>
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>○新学習指導要領実施に向けて、シラバスの見直し</li> <li>○各学年の系統性と教育的意義のある宿泊的行事実施の検討</li> <li>○これまでの英語教育の振り返りを行い、初等部オリジナルの英語教育の模索</li> <li>○KGタイムの抜本的見直し</li> </ul>

2017 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【児童が命の大切さを感じ、よりよい人間関係を築くことができる指導を進める。】	自己評価	A
目標	キリスト教主義教育に基づいて指導にあたり、生命の大切さを重んじる心、互いを思いやる心を持つ児童、また、社会の一員として責任ある態度を持ち、よりよい生活を築いていこうとする児童を育てる。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>【具体的な取組の状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○2 学期から緊急地震速報装置を導入し、避難訓練時に具体的な発報を行うことでより児童が緊張感を高めて臨み、実際の場面を想定して訓練を行うことができた。また、災害時の備蓄品の入れ替えや点検を行ったことにより、教職員の災害対策への意識を向上することができ、それらは日々の児童への安全意識の高まりにもつながった。これまで外部講師や教員がおこなってきた「命を守る学習」では、初めて安全委員会の児童が初等部警備員におこなったインタビュー動画を見せたり、自分の言葉で壇上から語りかけたりといった活動を取り入れた。その結果、担当した児童だけでなく、より多くの児童がより身近により真摯に「命を守る」ことを捉えることができた。</li> <li>○PTAの校外委員会と連携し、保護者の立ち番による登下校見守りをより充実させると同時に、保護者からの登下校に関する具体的な意見や質問に向き合うことで、児童の安全を守る視点で約束事やルールを見直し、それらを児童や保護者に</li> </ul>		

返すことでよりよい通学の仕方を提示することができた。朝の通学時には輪番制で教員が通学路に立って安全確認をすると同時に指導を行い、また、土曜日の下校時、特別な時間帯での下校の際には、担任が通学路途中の手塚治虫記念館前まで引率し、担任外の教員も通学路に立って児童の下校指導を行っている。

- 始業礼拝や終業礼拝などで担当から全児童に対して、安全やきまりを守ることを話す機会を持っている。3年前からは「5つの『守る』」というキーワードを用いて低学年の児童にもわかりやすく伝えるようにしてきた。それ以外にも必要に応じて、朝の礼拝後に生活指導に関する指導や連絡をおこなっている。また、学事委員以外の教員からも朝の礼拝での講話、朝の会や帰りの会などにおける学級での説諭などを通じて、指導を行ってきた。特に、あいさつについては初等部にかかわる人々に対して「自分から先にあいさつをする」ことが意識できるように、日々の学校生活だけでなく、こころの時間や命を守る学習などで指導をしてきた。
- 一人ひとりの児童が自分の居場所として、クラス、学年、学校があることを実感できるような仲間づくりをめざし、具体的には校内研修で「児童同士のかかわり合いの質を高める」ことを要点としてきた。様々な個性をもった児童が生活する学校ではさまざまな事象が生ずるが、そのたびに一人ひとりの児童の思いや立場を大切にしながら、今後のかかわり合いにも目を向けた指導や対応を行ってきた。
- 学事委員会が把握し、対応すべき事象については、その情報管理を行う手順を確立することができてきた。当該児童担任による情報収集及び学年主任による対応や記録、学事委員会への連絡、管理職への報告、全体での周知徹底、および再発防止や事後対応など、システム化を進めることができた。具体的な伝達方法としては教員には校長室会、教師会で学事委員会からの報告をする時間を必ず設けるようにし、保護者には教育講座の一部を「学事委員会からの連絡」という枠にし、現状の課題や連絡事項を伝えるようにした。

### 【その効果に対する評価】

生徒指導に関する肯定的回答の推移は、次の通りである。

- 保護者アンケート質問 18「学校は、子ども同士の間人間関係に配慮しながら指導している。」に対する「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した保護者の割合(2014年度 69.2%→2015年度 78.0%→2016年度 83.7%→2017年度 76.8%)。
- 教員アンケート質問 14「私は、児童間の人間関係を円滑にするための配慮、指導をしている。」に対する「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した教員の割合(2015年度・2016年度・2017年度 100%)。
- 保護者アンケート質問 17「学校は、命の大切さや望ましい仲間関係の育成などについて、指導している。」に対する「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した保護者の割合(2015年度 85.1%→2016年度 87.7%→2017年度 84.9%)。
- 教員アンケート質問 13「私は、命の大切さや良好な人間関係をつくることなどについて、学校生活の中で指導している。」に対する「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した教員の割合(2015年度 96.3%→2016年度 100%→2017年度 100%)。
- 保護者アンケート質問 15「学校は、集団生活に関するルールやマナーについて適切な指導をしている。」に対する「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した保護者の割合(2015年度 83.3%→2016年度 87.4%→2017年度

	<p>86.0%)。</p> <p>○保護者アンケート質問 16「学校は、しっかりと挨拶ができるように指導している。」に対する「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した保護者の割合(2015年度 83.9%→2016年度 84.3%→2017年度 83.2%)。</p> <p>○教員アンケート質問 12「私は、挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーが児童に身につくよう適切に指導している。」に対する「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した教員の割合(2015年度 100%→2016年度 100%→2017年度 96.7%)。</p> <p>保護者の回答ではアンケート項目での肯定的な回答の割合がいずれの質問においても昨年に比べて下回っていた。特に、保護者アンケート質問 18「学校は、子ども同士の人間関係に配慮しながら指導している。」に対する「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した保護者の割合は昨年度から 6.9 ポイント下がり、一昨年の結果をも下回っただけでなく、80.0%を割り込んだ(76.8%)。保護者アンケート質問 17「学校は、命の大切さや望ましい仲間関係の育成などについて、指導している。」に対する「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した保護者の割合が一昨年度水準に下がった(84.9%)。教員アンケート質問 13では肯定的な回答が昨年と変わらず 100%だった。教員は一年を通して、意識を高めて取組んできたことが見て取れるが、これらの結果については重く受け止め、教員一人ひとりがこれまでの指導について振り返り、学校としても重要課題として取り上げて進めるべき視点である。</p> <p>保護者アンケート質問 15「学校は、集団生活に関するルールやマナーについて適切な指導をしている。」質問 16「学校は、しっかりと挨拶ができるように指導している。」については「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した割合を下げているが、同時に「まったくそう思わない」という回答の数値も下がっている。(2016年度 3.3%→2017年度 2.5%、2016年度 2.3%→2017年度 1.2%)このことから、指導の広がりを実感すると同時に、さらによりよく指導を進めることや高い次元での達成目標を持って臨むことが求められていることがわかり、来年度への課題として受け止められる。</p> <p>ほとんどの教員が児童のよりよい学校生活や仲間づくり、命の大切さやあいさつの重視などについて意識を高めて取組んできている。しかし、保護者がその成果を実感として受け取るまでには至っていない部分があることがわかった。同様に、児童アンケートでは質問 11「学校のきまりを守って生活していますか。」、質問 12「だれにでも元気よくあいさつをしていますか。」、質問 13「学校で、命の大切さやなかまの大切さなどについて学んでいますか。」、質問 14「思いやりのある友だちが多いですか。」、質問 15「友だちが困っていたら、助けていますか。」、質問 16「友だちの意見や考えをよく聞いていますか。」、質問 17「相手の気持ちを考えて行動することができていますか。」の各項目で、昨年度と比べて低下が見られた。児童が自信を持ってアンケートに答えられるよう、日々の学校生活の中で善き言動を認め、課題が見られる場合には適切に指導することを繰り返していくことが大切であると改めて振り返った。</p>
<p>今後の方策</p>	<p>これまで同様、礼拝や講話、授業研修などのあらゆる場面で命の大切さや仲間づくりの良さを意識した取組を続ける。児童の安全確保や安全への意識の向上、よりよい生活習慣の確立、豊かな仲間づくりを進めるためには、保護者の協力が必要となる。そのためにも、公開できる情報は保護者にも連絡し、よりよい協力体制を確立しておくことが大切となる。今後も P T A の役員会、各委員会と連携し、協力を仰ぎながら進めていくことにする。</p>

	<p>児童が校内でけがをする事象を減らし、安心して学校生活を送ることができるよう、安全管理を重視し、一歩先を見据えた取組を行っていく。</p> <p>南海トラフ地震やJアラートの発報など、今後想定されている災害や事象に対しては、学校としてよりよく対応できるよう、常に最新の情報に基づいて見直しを進めていく。</p> <p>依然として、教員間での取組や意識には、まだ幾分かの差異がみられるので、日々の教育活動、研修の機会をいかしてキリスト教主義教育に基づいた関西学院初等部の生徒指導をすべての教員が同様に展開できるよう取組んでいく。</p>
--	---

2017年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

<b>評価項目</b> 【テーマ】	<b>研修（資質向上の取組）</b> 【“Mastery for Service”の体現をめざす～かかわり合いの質を高める～】	自己評価	B
<b>目標</b>	<p>ミッションステートメントの主旨には、「他者への関心と思いやり」が“Mastery for Service”を支えるとある。「他者と対話し共感する能力」を持ち「よりよい世界を創造」することが我々のミッションである。初等部での教育活動が、こうした力の獲得をめざすものであることを常に確認し続け、それに応えうる教員集団としての資質向上をめざす。</p>		
<b>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</b>	<p>【具体的な取組の状況】</p> <p>&lt;学校公開会の実施&gt;          全国の教員及び一般希望者に対して、初等部の授業を公開する（2/17）。約600名の参加者に対して、合計23の授業を公開する。また、新学習指導要領に関する対談や、奈須正裕教授（上智大）を招いての講演などを企画した。すべての公開授業で事後検討会を開き、参加者と意見を交流する。「かかわり合い」が成功しているのかどうかに焦点をあてる。</p> <p>&lt;校内研修 公開授業（大授業）&gt;          年間4回、公開授業を実施した。全教員で事前検討会を開き、模擬授業形式で指導案を吟味。授業参観の後、事後検討会を行った。協議を踏まえ、授業者は「もう一度同じ場面で授業を行うなら」という仮定に基づいて指導案を改訂したうえで「Before After 指導案」を提出。</p> <p>&lt;校内研修 公開授業（小授業）&gt;          全ての教員による公開授業を実施した。見学した教員（学年団の教員は必ず見学する）とのリフレクションを行った。大授業同様に「Before After 指導案」を提出。</p> <p>&lt;校内研修 その他&gt;  <b>各種勉強会</b>          本校教員が主催する勉強会を開いた。プログラミング教育研修では、iPadのアプリケーションでロボットを動かす体験を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キリスト教研修</li> <li>・特別支援教育研修</li> <li>・プログラミング教育研修</li> </ul> <p><b>映画鑑賞</b>          『みんなの学校』監督：真鍋俊永（文化庁芸術祭大賞ほか）大阪市立大空小学校が取組む、「すべての児童に居場所がある学校づくり」についてのドキュメント映画を全教員で鑑賞し、意見交換を行った。</p>		



	<p><b>指定読書会</b>  研修委員会から提案したリストの中から書籍を選択し、各学年で座談会を開いた。あらかじめ課題本を読み、それぞれの学びを共有した。</p> <p><b>任意読書会</b>  研修委員会主催の読書会を複数回実施した。ジャンルは多岐にわたる。任意参加ではあったが、毎回盛んな話し合いが行われ、物事の見方・考え方に新たな視点を加えた。</p> <p><b>【その効果に対する評価】</b>  今年度のアンケートからは、特徴的な結果が出た。端的に述べると保護者からの評価が上昇し、児童からの評価が低下した。  保護者のアンケートを見ると、質問2「初等部の教育には満足している。」では89.2%が肯定的評価（強くそう思う＋どちらかといえばそう思う）を示し、前年度83.5%から上昇している。また、質問5「学校は、子どもの学力を把握している」は87.1%（前年度83.6%）を示した。具体的に見ても、質問8「学校は、基礎的知識や技能が定着する授業を行っている。」の項目で85.7%（前年度83.8%）、質問9「学校は、基礎的知識や技能を活用する場面を取り入れた授業を行っている。」の項目で84.4%（前年度80.0%）となっていて、どれも数値を伸ばしている。教員のアンケートを見ても、質問7「私は、授業研究を積み、児童が魅力を感じる授業を展開できるように努めている。」が100%（前年度93.3%）となり、意識が高まっている。ただし、この項目において「強くそう思う」と答えた教員は43.3%（前年度53.3%）と減少し、よりよい授業づくりに対する戸惑いが感じられるのも事実である。これは、新学習指導要領の新しい方向性を目の当たりにし、自らの取組を改善しなければならないという謙虚さの表れともとれる。  児童の評価において気になる点がある。質問6「授業では、自分で進んで、友だちと話し合ったり、考えたり、まとめたりしていますか。」が77.6%（前年度85.4%）となり差が生まれた。「かかわり合いの質」を研修テーマに掲げている初等部としては下げてはいけない数値である。もう一度全教員で授業のあり方を見直し、かかわり合いの中から生まれる本質的な授業をめざす必要がある。また、「力の時間」に対する評価が下がった。質問8「「力」の時間は好きですか。」の項目は70.7%（前年度88.8%）と下がり、論理的な思考を楽しむという授業の意義がうまく伝わっていない。教員アンケートでも質問9「学校は「力」の時間を通して、論理的に思考する力を育てている。」という項目が62.0%（前年度89.7%）と下がっている。これは児童の不満を耳にした教員の印象が数字に表れたものと考えられる。早急な対応が必要である。  一方明るい材料としては英語教育の評価が少しずつ上昇していることが挙げられる。児童からの評価はほぼ変わらない。しかし、保護者からは質問13「学校は、英語教育を通して、英語によるコミュニケーション能力を育てるとともに、基本スキルを定着させている。」73.6%（65.2%）と上昇し、教員のアンケートでも同様の質問において80.0%（76.7%）を示した。英検への取組が結果につながり、成長が目に見える形で証明されていることも理由のひとつと言えるだろう。</p>
<b>今後の方策</b>	<p><b>&lt;対話的で主体的な授業の開発&gt;</b>  「対話的で主体的な、深い学び」とは新学習指導要領でうたわれている新しい学びのキーワードである。われわれがめざしてきた「かかわり合いの質の高さに支えられた学び」そのものと言ってもよい。「深い学び」とは他の学びに転移できる資質能力を獲得することである。こうした学びを実現するためには、まずそれぞれの学級が親和性の高い人間関係を構築する必要がある。リーダーが固定せず、多様な</p>

	<p>意見が生まれ、新しい見方考え方が生まれる授業デザインを意識し、全教員が実践を出し合う。</p> <p>同時に、「学級の自治力」を向上させる方策を具体的に練る必要がある。初等部の授業現場では対話場面のバリエーションが生まれ始めている。教員による学習レベルのコントロールは常に必要だが、児童が主体的に取り組める授業を開発する。各教員による意欲的な実践を積み上げる。</p> <p><b>&lt;指導案改革&gt;</b></p> <p>小学校教育における指導案には一定のスタイルがあり、それぞれのグループで踏襲されてきた。しかし、明確にめざす授業がある初等部においては、新たな形式の指導案が生まれてもよい。「学びの履歴」「予想する児童のつぶやき」「単元でつきたい資質能力」「本時の見所」「ゴールの姿」など具体的な項目を挙げ、書きやすく見やすい指導案を作成する。</p> <p><b>&lt;特別活動に関する研修&gt;</b></p> <p>学級の自治をめざす初等部として、特別活動やその中の学級活動などをいかに推進するのかという研修を行う。全ての児童がリーダーとなりえる活動のあり方を教員団として共有する。</p>
--	---

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

## 総合評価

初等部のキリスト教主義教育については、多くの保護者と子どもの期待に十分応えていると言える。初等部の根幹にかかわる部分だけに、更なる充実につとめていく。

日々の授業については、わかりやすさが、保護者や子どもから評価されている。教員の授業研修への取組や日々の教材研究の成果だと考える。しかし、初等部独自のプログラムである「風の時間」「力の時間」については、どのような力を子どもが身につけているかがわかりにくい状況となっていることがうかがえる。今後の課題である。

生徒指導に関しては、担当中心に発達段階に応じて具体的に指導しているが、挨拶に関する指導などは、より一層の指導が必要である。

保護者アンケート質問2「初等部の教育には満足している。」では肯定的評価が89.2%となっており、年々評価が高くなってきている。キリスト教主義を土台とした建学の精神やスクールモットー“Mastery for Service”を大切にした日々の教育活動が児童や保護者に理解されていると考えられる。

## 2017年度の評価をふまえて2018年度に予定している評価項目、テーマ等

キリスト教主義教育  
 教育課程・学習指導  
 生徒指導  
 研修（資質向上の取組）

### 第三者評価／学校関係者評価

アンケートの結果は、全般的に良い結果でした。各項目の評価が高いことに、教職員による日々の研鑽を感じることができます。

児童を対象としたアンケートでは、質問1「学校は楽しいですか。」という問いにおいて肯定的回答が90.0%、質問5「授業はわかりやすいですか。」は91.1%、質問6「授業では、新しいことをたくさん知ることができますか」は92.7%、質問10「音楽や図工は好きですか。」は91.2%という値になっており、高く評価できます。

質問9「英語は好きですか。」という問いにおいても、肯定的回答が7割弱あり、良い結果だと言えます。ただし、3割の児童が英語の授業に苦手意識を感じていることは、一昨年度（2015年度）と昨年度（2016年度）の結果とほぼ同じでした。英語の授業の何が「好き」という回答から遠ざけているのか、何が「わかりやすさ」の達成を難しくさせているのかについて、児童、保護者、教員という三つの観点から分析・検討し、改善に向けた学びの場を具体的に設定する必要があります。英語教員だけでなく、他教科・他領域を専門とする教員との連携のもと、子どもたちが「うきうき・わくわく」できる英語の授業が求められます。

授業や休憩時間の様子を参観していると、どの児童の表情にも明るさや積極性を見てとることができました。キリスト教主義教育、学級経営、生徒指導、教科指導等の取組が充実しているのだと想起されます。

少し気になる点として、児童を対象としたアンケートとして質問6「授業では、自分で進んで、友だちと話し合ったり、考えたり、まとめたりしていますか。」(85.4%→77.6%)と、質問8「「力」の時間は好きですか。」(88.8%→70.7%)が、それぞれ下がっていたことです。ペア学習やグループでの話し合い活動など、教育の方法としては、すでにさまざまな工夫が授業で行われているかと思えます。今後は既存の教育方法に加えて、各教科・領域において「他者とかわること」の意義や難しさについて考えるといった、教育の目標や内容自体をコミュニケーションの観点から再編し、実践していくことも必要な作業だと思われます。また、「論理的な思考を楽しむ」という「力」の授業の意義を見つめ直すことで、児童が「日常生活における必要性」と「楽しさ」を感じることができる授業の展開を期待しています。

登校時、正門で校長先生が児童に声をかけ、笑顔で迎えておられました。児童、教職員のかもしだす学校の雰囲気は、あたたかなものを感じました。

毎朝の礼拝では、全校児童、教職員がチャペルに集い、共に聖書の言葉を聴き、讃美歌を歌い、祈り、話に耳を傾けることは大切なことです。また、初等部につながるいろいろな人たちからお話を聞くことも心を豊かにすると思えます。キリスト教主義教育において、礼拝は欠かすことができません。これからも誠実に守り続けることを願います。

今年度も5、6年生では、教員の専門性、授業レベルが同じになる等から、教科担任制を取り入れたこと、そして、「全員参加」「全員理解」を掲げ、授業を工夫された点は評価できます。補習授業などで一人ひとりの児童に寄り合い対応していることは、キリスト教主義教育の点からも大切なことです。

教員の資質向上としての研修について、公開授業、授業見学は有効な取組です。教員の熱意、願い、思い、そして実践はとても評価できます。しかし、「かわり合いの質」において児童の評価が少し気になるかとされています。「教員全員で授業のあり方を見直し、かわり合いの中から生まれる本質的な授業をめざす」とされていますので、教員同士で授業の振り返り、児童のための、より質の高いキリスト教主義教育の授業を、今後さらに期待しています。

キリスト教主義教育について、初等部では毎朝の礼拝の時間をきちんと設けており、学年ごとに静粛に入場し、礼拝時では美しい讃美歌の歌声と、きちんと話を聴く姿勢を大事にしています。語られるメッセージは、教員がしっかりと準備をしており、生徒の心の教育としてふさわしい時間が流れています。中学部に入学しても、その姿を大切にしてくれているので、当然のことながら高い評価が続いていると考えられます。今後もぜひそうであってほしいです。

子供たちにとって、毎日の授業が学校生活の中で最も重要なものです。教師は、授業の準備と振り返りに多くの労力を割いています。低学年になるほど、いかにわかりやすい授業を行うかは難しいと思いますが、初等部の教員がお互いに情報を共有して教材を作成し授業を実施していて、その結果が高い評価となって数字に表れています。実際に何度も授業を見学させていただき、授業のわかりやすさを実感しています。

生徒指導については、「初めて安全委員会の児童が初等部警備員におこなったインタビュー動画を見せたり、自分の言葉で壇上から語りかけたりといった活動を取り入れています。その結果、担当した児童だけでなく、より多くの児童がより身近により真摯に『命を守る』ことを捉えることができた。」との報告でわかるとおり、受け身ではなく、生徒が自主的に命の大切さについて学ぶ機会を設けていることにとっても共感を覚えます。挨拶や礼儀も小学生として立派であり、また教員が児童の安全を常日頃から大事にして、登下校を見守っていることに頭が下がる思いです。

初等部で感心することは、研修の機会を多く設け、外部にその扉を開いていることです。ありのままの姿をきちんと公開し、より良い学校をめざして歩もうとする姿勢が今年も伝わってきます。準備や様々な場面での苦労は、決して無駄にはなっていないと確信しています。

「全ての児童がリーダーとなりえる活動のあり方」という言葉が最後にみられますが、まずは関西学院の生活の中で、他の人のために行動することがいかに大事であるかを、教員が理解しており、生徒をより高い舞台へと導こうとしていることを、これからも大切にしてほしいと願います。派手なことができない目立たない生徒にも、必ずできることがあります。笑顔で授業を受けるだけでそのクラスは素晴らしいクラスになります。個々の良さを認め、良いところを認め伸ばす教育の実践を、これからも期待しています。

キリスト教主義教育については、児童・保護者・教員の高い評価は、評価できます。

保護者アンケートの教育課程・指導に関する肯定的な割合が高いことは、評価できます。

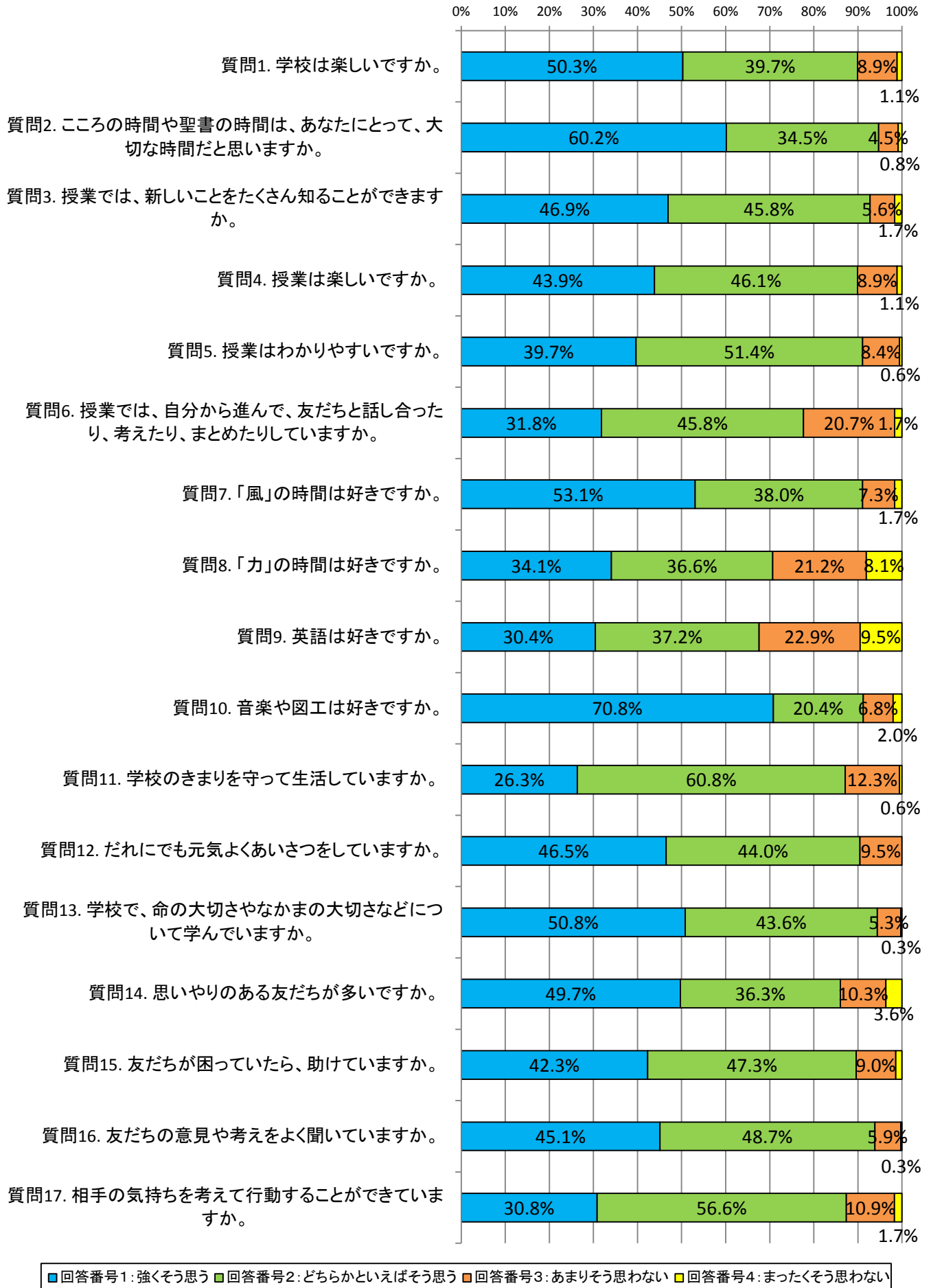
生徒指導については、保護者・教員の肯定的割合が継続して高いことは評価できます。ただし、保護者の「人間関係」についての「強くそう思う」の割合が低下している点についてなぜそのような結果になったかを調べ、その割合を高めることが期待されます。

研修について、様々なアンケートの評価が高くなってきていることは評価できますが、低下しているアンケートについては、なぜそのような結果になったかを調べ、その割合を高めることが期待されます。

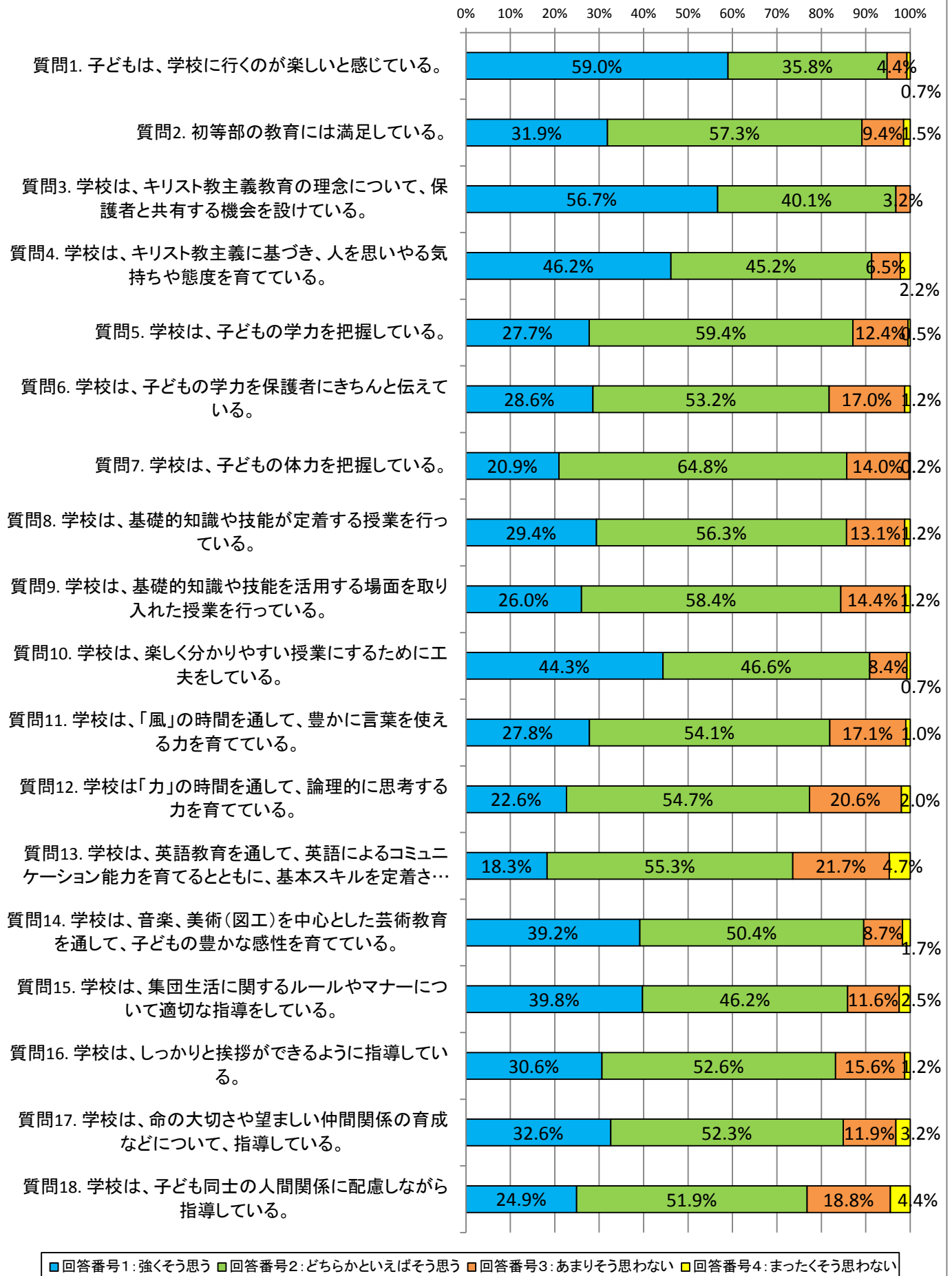
児童の作品の展示の見学では、児童の作品が十分に作りこまれており感銘を受けました。

2017 年度学校評価

2017年度 学校評価アンケート集計結果  
初等部・児童3年生～6年生（回収率 100% 359人/359人中）



2017年度 学校評価アンケート集計結果  
初等部・保護者（回収率 74.8% 406人/543人中）



2017年度 学校評価アンケート集計結果  
初等部・教員（回収率 100% 30人/30人中）

